

古 典 昆 虫 記

—— 素材の覚え書き ——

中 泐 正 堯

た。

(一)

私には、昆虫の中でも、とくに蝶に対する興味が、中学時代からあって、この興味がどこまでも尾をひいているようである。それで、高校のころ

大原や蝶のいで舞ふ朧月

丈草

なる一句に接したりすると、眼を輝かしたものである。ところが、月夜に蝶が舞うのは変だから蛾のあやまりであるなどと科学者めいたことを言われて、私はすいぶん不服であったのを思い出す。蕪村の公達に狐化けたり宵の春

などは科学的にはありそうもないのに、人々は春のぼんやりした、なまめかしい宵の気分が出ているなどといって満足もし、納得もしているのが、また不服であった。狐を認めるなら、蝶も認めてやれ、だいいち蛾の舞う朧月夜なんてセンスのない話だと思っ

た。大学時代、芭蕉連句演習で、「ひさこ」（木のものとの巻）の発表を聞いてみると、

順礼死ぬる道のかげろふ

何よりも蝶のうつゝぞあはれなる

翁

曲水

というところにさしかかった。順礼が路上で死に、その周囲を蝶が「心有りや心無しや死を哀めりや春を薬めりや何かは知らず」（露伴解）飛びめぐるというのが、まことに印象的であった。印象的というのは、芭蕉の付け合の気味もさることながら、私のもちまえの興味が動いたのである。この蝶が何であるかによって相当この情景に変化をきたすぞ、と考えたのである。蝶はさまざまな色彩を持っており、連句に興じている翁の頭には蝶という昆虫の映像がどん

なものであったか（知ることは不可能？）を想像してみることは、私には愉快であった。

しかし、それはどこまでいっても、現代人の私が恣意的に想像する域を出ない。推定することは、私の考えではつぎの方法しかない。芭蕉の昆虫素材をしらみつぶしに、あらゆる角度から検討し、芭蕉の昆虫知識を推定すること。文獻に記録されたすべての昆虫素材を芭蕉の前後までたどってみること。生物学からの裏付けをすること。その作品にはなにがふさわしいか（これが重要なことだが）ということ。それらの結果を得れば、この場合の蝶もなにか推定できるであろう。それほどまでして、この蝶を何か決める必要があるのか、固執するわけではないが、すくなくともこれを説明するのに「そのあたりを、ひらひらと蝶が舞っている」という言いかたは避けなくてはならない。蝶は「ひらひらと舞う」ようなものばかりではないからである。芭蕉の頭の中に、そんな蝶の映像があったと言ひ切れるなら別だが……。

(二)

「古典の窓」第五号奥の細道特集（角川書店）にこんな記事がある。「東北地方における足跡」と題する阿部西喜夫氏（山形県立谷地高校校長）の原稿である。

『山寺での吟「閑さや」の蟬の場合でも福本日南が油蟬であろうといったこと、昭和になって歌人の斎藤茂吉が「にいにい蟬」であろうといったことなどを話してきかせ随行日記の日次と天候を調べさせて本県の梅雨期と蟬との関係を考察させて見ることもこの句の

理解に役立つ。私は五年間ばかり梅雨と蟬との関係を統計にしたことがあったが東北の梅雨は約一カ月、六月から七月初めにかけて降りみ降らずみの日が続き丁度梅雨の明けたと思われる日初蟬の「にいにい蟬」が鳴き出すことを確めた。群蟬か二、三匹の蟬かは梅雨明けの蟬であることから二、三匹であったであろうと思わざるを得ない。参考までであるが千代尼の句に

初蟬や木々の滴の絶えし時

というのがある。元禄二年の年は閏のあった年であるから新暦換算の場合は一カ月遅れで考え閏のあった年の旧五月廿七日山寺へ出かけた丁度芭蕉が山に登った午後三時頃蟬塚のあたりで蟬の鳴くのを聞いたことがある。このあたりは左手に慈覚大師の入定岩あり、右手に胎内くぐりの岩山があつて岩にしみ入るの感を深くしたものである。二、三匹の蟬であつた。』（同誌一一九ページ）

江戸時代から今日までの時間の経過が、この種の奥地踏査を不安にさせるが、旧暦との調整など、ずいぶん教ええられる。

蟬で思い出したが、「かけるふ日記」の一節に

『さながら八月になりぬ。

朔日の日、雨ふりくらす。しぐれだちたるに、末の時ばかりにはれて、くつくつぼうしといはる。いかなるにかあらん、あやしうも心ばそら、涙うかおひなり。「たぶん月にしぬべし」といふさとしもしたれば、この月にやともおもふ。』（古典文学大系20△岩波書店▽二八二ページ）

とある。これは「くつくつぼうし」とはつきりしているのに、こんどは「くつくつぼうし」という蟬を知らぬ。喜多義勇・全講蜻蛉日

記をみると、次のような注がある。

▽くつ／＼ぼうし——和名抄に、「蛸蟪、和名久豆久豆保宇之、八月鳴者也」と説き、「其声如謂民々」とした。掖齋はこの方を都久都久保宇之とし、別に「寒蟪」を久都久都保宇之としている。大言海は「くつくつぼうし」を今の「つくつくぼうし」として寒蟪の字をあて、蛸蟪を「みんなん蟪」としている。

これで見ると「つくつくぼうし」か「みんなん蟪」かわからない。阿部氏のように実地踏査をこころみとおもしろいと思う。

作品とのマッチという点では、「みんなん蟪」は盛夏の蟪であり、「つくつくぼうし」は初秋を告げる蟪である。前者は生命の盛りを謳う蟪であり、後者は生命の凋落を告げる蟪である。いずれも聞きかたによっては、「かしがましきまで」となりうる。ただ『たゝん月に死ぬべし』といふさとしもしたれば、この月にやともおもふ。』という内容には、「つくつくぼうし」がふさわしいという気がする。

(四)

古今集の動物素材の中で、もっとも多いのは「郭公」である。古今集千百首中四十二首出てくる。ほととぎすに「郭公」の字をあてているが、「郭公」はカッコウであり、古今集では、よぶこどりがそれである。カッコウとホトトギスは酷似していて、ホトトギスはキヨキヨキヨと鳴き、俗には『テッペンカケタカ』と聞こえるとき

れている。ホトトギスは、あやなしどり、くつてどり、うづきどり、しでのたおき、たまむかえどり、夕影鳥、夜直鳥などの別称がある。そりである。

以下、動物素材を羅列する。カッコウ内の数字は頻度数である。照(11)うぐひす(28)、かり(24)、しか(11)、つる(9)ゆふつけどり(1)鶏(5)、こま(1)馬(5)、とり(4)、ささがに(1)くも(3)、千鳥(3)、いなおほせどり(1)実体不明、古今伝援三鳥の(1)(2)、かめ(2)、きじ、けだもの、しほがひ、うづら、しぎ、をしどり、にほどり(1)かいつぶり、かも、宮こどり、かはづ、よぶこどり、ましら(1)猿(各1)

いわゆる鳥の歌が多く、古今集の代表的な三鳥としては、ほととぎす、うぐひす、かり、といえようか。

(四)

古今集における昆虫素材と、ひとくちに言っても、さまざまな形で登場するが、べ歌数は三十二首になろうか。まず挙げなければならぬのは「くさむらになく虫」たちであらう。

題しらず

よみ人しらず

185 わがためにくる秋にしもあらなくに 虫のねきけばまづぞかなしき

こうした歌が六首ある。古今集の歌人たちは「虫のね」「なく虫」というと、「かなし」「さむし」「わぶ」「わびし」といった語感の世界を連想したようである。

題しらず

清原ふかやぶ

581 虫のごとこ多にたててはなかねども 涙のみこそしたにながる

れ

この歌の「虫」という素材と一八六の「虫」という素材は質的にややちがっているようである。それは、五八一が「虫のごと」という比喩表現であって、「そこで鳴いている虫」という感じがうすいせいであろう。比喩表現でも長塚節の歌などは、またちがっている。長塚節の一首に

小夜深よひにさきて散るとふ稗草ひんげのひそやかにして秋さりぬらむ
というのがある。これについて吉野秀雄氏はこう説明している。

『「稗草」のノはノウウニで、つまり第三句までは「ひそやかに」にかかる序であるが、この序は虚ならぬ実の序であるというよりも、一首をなり立たせた重大な要因と見ねばならない。すなわちひそかに秋が来たというだけでは歌にならぬのが、この序の具体を得てたちまち詩化され文学化されたのだ。』（新編高等学校国語二）
二々好卦社V一八〇（六）

これと同じことが、節の「馬追虫うまおひ」の歌についてもいえる。馬追虫の鬚ひげのそよに来る秋はまなこを閉じて想ひ見るべし

この歌など、「馬追虫」のあの体長に倍する鬚の繊細な感じを知らなければ、と思ふ。

なお「くさむらになく虫」は引用した二首のほかに、一九七、一九九、四五一、八五三の四首がある。「くさむらになく虫」で奥体のはっきりしている筆頭は「きりぎりす」である。一九六、一九八、二四四、三八五、四三三、一〇二〇の六首である。

これらの歌にも、「あはれ」「かなし」「ながきおもひ」「を

し」「さむさ」などの語句が付随している。六首の「きりぎりす」の素材としての軽重は、

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

素性法師

我わがのみやあはれとおもはん きりぎりすなく夕かげの山となでしこ

これは素材がふたつあり、ひとつは「きりぎりす」、ひとつは「山となでしこ」である。前者は聴覚のもの、後者は視覚のものである。いま「山となでしこ」が中心素材で、「きりぎりす」は添えである。

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすのなきけるをきよてよめる

藤原たよさ

きりぎりすいたくななきそ 秋のよのながきおもひは我ぞまされる

これについては、「人のもとにまかれりける夜」の題詞に注意するよう、佐伯梅友氏が指摘している。つまり、「表面はきりぎりすへの注文であるが、家の主人の嘆き悲しむのに対することばとしていう心持をこめている。」（古典文学大系8 岩波書店V一四一ページ）というのである。きりぎりすは暗に主人をさしているのである。

他の四首は、純粋にきりぎりすを歌っているとみてよいと思われる。

このごろは「コオロギ」の声を聞くことがなくなった。郷里の私の家は、山に接しているからであらう、土間になくコオロギの声を

よく聞いた。いまは、街の騒音しか聞かれぬが、さてコオロギの声
といつても、さまざまである。

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

在原むねやな

1020 秋風にはころびぬらし ふぢばかま つゞりさせてふきりぎ
りすなく

「つゞりさせ（＝綴り刺せ）」となくコオロギ、今では「肩させ
据させ」となくそうである。「ツツレサセコオロギ」人家の内外、
野外に普通の代表的な秋のコオロギ。（中略）リーリーリーと続け
なく。」（新原色昆虫図鑑・河田覚、加藤静夫共編・三省堂・一八
ページ）ついでにエンマコオロギは「コロコロコロと大きな美声で
鳴く。喧嘩鳴きはコロコロコロツとけたたましく、誘い鳴きはコ
ロコロコロリーリーとやさしい。」（同書一八ページ） その
ほか、タンポコオロギがジイ・ジイ・ジイと鳴き、ハラオカメコオ
ロギがジ・ジ・ジと鳴くのだそうである。

とまれ、平安朝の秋の野辺に、前栽に鳴きくらすコオロギの声が、
いまよりかずと美しく、味わい深いものであったにちがいないと
思うのは私だけであらうか。

題しらず

よみ人しらず

200 君しのお草にやつるゝふるまとは 松虫のねぞかなしかりける
「まつむし」の「まつ」にかけて「君を」「人を」「我を」「た
れを」とある。「松虫」の歌は二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三と
四首ある。右に挙げた二〇〇の歌もそうであるが、「くさむらにな
く虫」と「かなし」の結びつきは、とりあげて言つてよいかと思わ
れる。

松虫は、今の鈴虫で、松虫と鈴虫のちがいは、その体色と鳴き声で
わかる。形はよく似ていて、松虫がやや大きい。 図鑑を見ると、
松虫は、まだうっすらと緑色を残している朽葉色、鈴虫は、黒々と
している。松虫は、「かわいた草地にいて夕方から高く鋭い音でチ
ン・チッチ・チンと速く鳴き、鈴虫は、「草むらの地ぎわや日
かげの石の間にすむ。リーの前奏のちりりん・りん・りんと
体をうち振りながら数回続ける」と説明がある。

題しらず

よみ人しらず

201 秋のの道もまどひぬ まつむしのこゑする方にやどやからま
し
秋の野に「打ち振る鈴の音」を聞けば、古今人ならずとも心ひか
れるであらう。

リン・リンとすきとおるように響く鈴虫（＝古今集ではマツ
ムシ）の音が、どんなものであるか、つぎの一句が教えてくれる。

鈴虫の鳴きやすむなり虫時雨

松本たかし

古今集にめづらしい一首がある。

題しらず

よみ人しらず

202 すがるなく秋のはぎはら あさかちてたびゆく人をいつとかま
たん

「すがるなく」とはもちろん羽音をいうのであらう。地面から縁
先へ、縁先から軒下へと休むことを知らず動きまわるジガバチが、
いまは「はぎはら」にいて、人間の送別に無縁の体である。ジガバ
チは胴が細く、その先に米粒ほどのシリがある。まるで線香花火が
燃えつきて落ちる寸前のようなシリをもったあのハチである。

「くさむらになく虫」にしても、つぎの「樹上になく蟬」にして

も、「虫がなく」とは「古今人の心がなく」ことだといったら言い過ぎであろうか。芭蕉の「蟬」もそうかもしれない。しかし、私には「奥の細道」になく「蟬」の声がはつきり聞こえる。和歌と俳諧の世界の相違かもしれない。

○「せみ」の用例はつぎの三つの形がある。

○空蟬のから(四四八、八三一)

○蟬のはの……うすし(七一五、八七六、一〇三五)

○せみ(うつせみ)……なきくらす(五四三、一〇〇三)

「小泉八雲が蟬の鳴き声のなかで一番美しい」(俳句歳時記・角川書店編・五三九ページ)とする「ひぐらし」の歌が三首(二〇四、二〇五、七七二)ある。

このヒグラシは、早朝と夕暮れ、杉の木立ちの中などで、一種哀調を帯びた声でカナカナカナと鳴く。

題しらず

よみ人しらず

205 ひぐらしのなく山ざとの夕ぐれは 風よりほかにとふ人もなし
772 こめやとは思ふ物から ひぐらしのなくゆふぐれはたちまたれ
つゝ

いづれも「ひぐらし」のなく夕ぐれの、人恋しさが感じられる。

人を待ちつつ、しかし「ひぐらし」のなく山里の寂々しさに、姿勢をくすすず観じ入っている古今和歌人、私は万葉人とのちがいをそんなところに感ずるのだが……。

ひぐらしの声にいちまつ寂しさを感ずる人なら、火にこがれ、火にもゆる「夏虫(=蛾)」にも、みずからひとす「螢」にも心を動かすであろう。

夏虫—こひ—おもひ—もゆ

螢—もゆ

と古今人は連想する。

夏虫の歌が五四四、五六二、六〇〇の三首。

螢の歌が五四三、五六二の二首である。

夏虫と螢は、だいたい同一の感覚素材であったらしく、これらの歌がいずれも巻十一、巻十二の戀寄一、戀歌二にあることは注意してよい。

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

紀ともりの

582 ゆふされば螢(ほたる)よりけにもゆれども ひかりみねばや人のつれなき

素材の変遷をたどるのは、これからの私のしごとだが、今、現代短歌の一例をあげて、結びとしたい。

窪田 空穂

その児らに捕らへられむと母が魂螢となりて夜をきたるらし

○

生物学、とくに昆虫学がさかんになったのは、おそらく明治以後だろうと思うが、それにつれて、国文学の素材の世界も豊富になり正確にもなった。「名もなき草」「名もなき虫」が通用しなくなったのである。古今集の素材のなかには、身近なものとして、「つばめ」や「蝶」がいなかった。素材に向ける視線は、時代とともに変わっていくようである。

この昆虫記を書くにあたって使用した参考書はつぎのとおりである。

古今和歌集（日本古典文学大系 8・佐伯梅友校注・岩波書店）

かげろふ日記（同 20・川口久雄校注・岩波書店）

全講頼鈴日記（喜多義勇著・至文堂）

俳句歳時記（角川書店編）

古典の窓第五号奥の細道特集・角川書店

新原色昆虫図鑑（河田 党 共編・三省堂）

新編高等学校国語二（志賀直哉ほか監修・好学社）

（広島市観音高等学校教諭）